

甲子園ホテルにおける照明器具について

—パブリックスペースに着目して—

安田 百江

[指導教員：武庫川女子大学教授 黒田 智子]

キーワード：甲子園ホテル、照明器具、遠藤新

1. 研究の背景

現在、武庫川学院の上甲子園キャンパスとして使用されている甲子園会館は、甲子園ホテル（1930）として、建築家・遠藤新（1889-1951）、支配人・林愛作（1873-1951）によって企画・設計された。遠藤は、近代建築の巨匠のひとり、アメリカ人建築家・フランク・ロイド・ライト（1867-1959）の愛弟子として知られる。甲子園ホテルは、1930年に竣工・開業し、14年後、早くもホテルとしての役目を終えた。第二次世界大戦を経て、1965年に武庫川学院が国から譲り受け、教育施設として再生した。文化財として貴重な建築物であるだけでなく、大学のキャンパスという身近な存在であるため、開業当時のことを詳しく知りたいと考えた。

2. 本研究の目的

本研究では、パブリックスペース（ホール・ロビー・宴会場など）における、照明器具を対象とする。その種類・配置から、特徴・意図を明らかにすることを目的とする。

3. 調査方法

パブリックスペースに配置されている照明器具を光源を覆う形状から3種類に分け、それぞれをシェル型・星型・格子型（図1）と名付けた。現状を把握するため、それらの配置、種類、数を平面図にプロットする。その結果を、開業当時の資料²⁻⁴⁾と比較し、何がどのように変化したかを確認する。

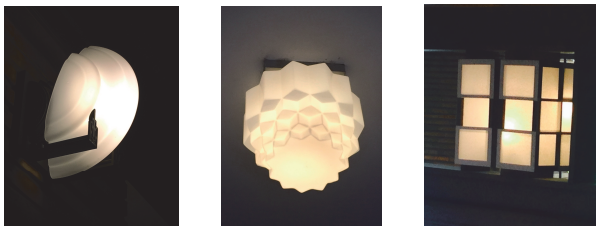


図1 シェル型

星型

格子型

4. 結果および考察

4-1 各階の特徴の考察

3種類の照明器具が、どのように配置してあるのかを示すための図を作成した。シェル型をオレンジ、星型を青、格子型を緑で表した。四角の数字は照明の光源の数を表す。（図2～図5）なお、シェル型光源1個と3個はブラケットのみで、その他のシェル型と星型は主にシーリングライトである。上の階に行くにつれて、照明の数は少なくなっている。

1階からみていく。シェル型については、光源25個のシーリングは、ロビーと東ホールに4ヶ所、13個は泉水の上部と東ホールに7ヶ所、4個は廊下に5ヶ所、3個は玄関入ってすぐの壁に2ヶ所、1個は廊下・東ホール・購買に38ヶ所配置してあった。これらのうち、ロビーの2ヶ所のシーリングは、開業当時の光源は25個ではなく13個だったと分かった。したがって、玄関から廊下をシェル型のシーリングやブラケットに導かれ東ホールに入ると、最多光源（25個）のシェル型に迎えられたと考えられる。（図2）

星型については、4個はテラスに2ヶ所、1個は廊下に2ヶ所配置してあり、数は少ない。（図2）

格子型は2種類あり、小さい四角16個を1個と数え、西ホールの天井をほぼ埋めつくす形で116ヶ所、立方体のものが4ヶ所にあった。合計で180ヶ所に配置してあった。格子型は西ホールのみ配置される一方、西ホールにはシェル型が1ヶ所も配置されていないことが注目される。（図2）

シェル型は、2階では、19ヶ所配置されていた。（図3）3階では、合計で21ヶ所配置されていた。2階・3階になるとシェル型が少なくなり、星型の割合が増えている。（図3、4）4階では、星形は9ヶ所に配置されていた。（図5）

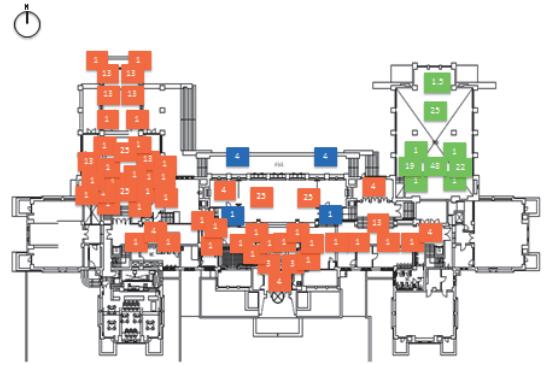


図2 甲子園会館の照明器具のプロット図1階



図3 甲子園会館の照明器具のプロット図2階

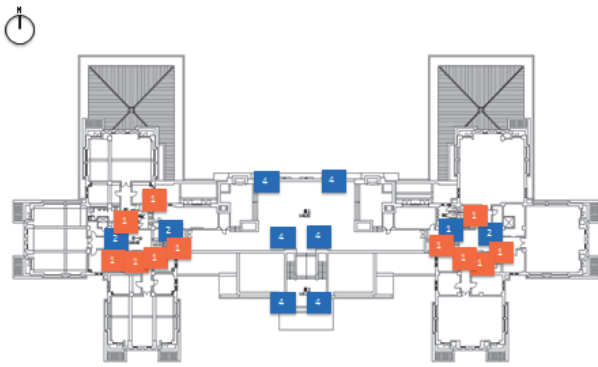


図4 甲子園会館の照明器具のプロット図3階

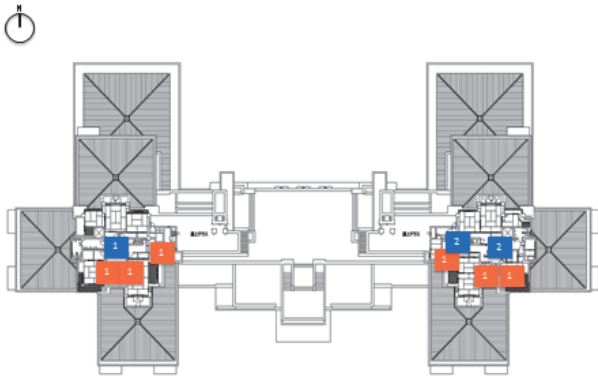


図5 甲子園会館の照明器具のプロット図4階

また、東ホールはチーク板張りりと明記されている。壁の上部まで覆っており、銀粉仕上げと共に落ち着きをもたらす意図ではないか。シェル型の配置が、より内部に招き入れられたと感じる演出であるとすれば、そのことに呼応している。

西ホールにも木の仕上げが用いられているが、種類は不明である。一方、西ホールは外装に使用されたボーダータイル、テラコッタタイル、日華石が使われている。したがって、東ホールとは対照的に、より外部空間を感じさせようとしたのではないかと考えられる。外部への出入口は、東ホールが1ヶ所なのに対し、西ホールは5ヶ所あることとも呼応していると思う。(図6)

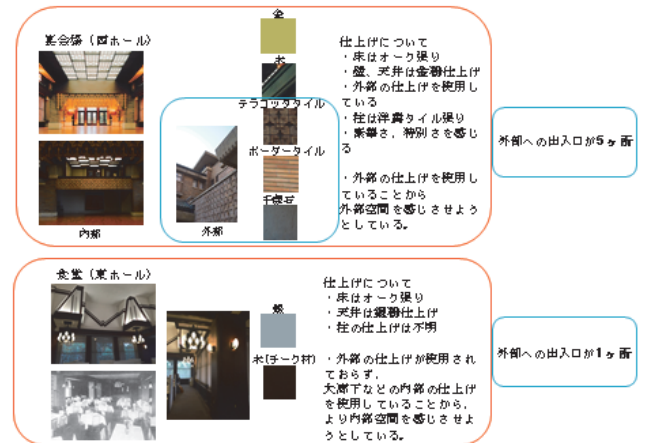


図6 西ホールと東ホールの違いについてまとめた図

4-2 西ホールと東ホールの違いについての考察

照明器具の種類・配置は、1階で大きく左右の対称が崩れている。それは、西ホールと東ホールの照明の種類・配置が異なるためである。開業当時、西ホールが宴会場(結婚披露宴、ダンスホールにも用いる)、東ホールが食堂に用いられ、用途が異なることが理由であると考えられる。照明器具と内装仕上げは、内部空間の雰囲気づくりに大きな効果がある。そこで、それぞれの壁、床などの仕上げの違いを合わせて考察してみることにした。

開業当時の記録³⁾をもとに内装について表1にまとめた。西ホールは、壁と天井が金粉仕上げであるのに対して、東ホールは天井のみが銀粉仕上げである。それぞれ、非日常の特別感・豪華さと、落ち着き・くつろぎを演出していると思う。

表1 西ホールと東ホールの違い

	宴会場(西ホール)	食堂(東ホール)
床	・オーク張り	・オーク張り
壁	・下地プラスチック木燻仕上げの上コルク吹き付けペンキ塗金粉仕上げ ・市木、窓台、階段:千歳石(日華石*)	・腰高羽目チーク板張り
天井	・下地プラスチック木燻仕上げの上コルク吹き付けペンキ塗金粉仕上げ ・中央断上紙張障子入 ・石膏彫刻金粉仕上げ	・下地プラスチック木燻仕上げの上コルク吹き付け銀粉仕上げ
柱	・洋歯カイル張り	

*千歳石は日華石とも呼ぶ

5. 結論

パブリックスペースの照明器具は、西ホールを除き、すべてシェル型・星型である。シェル型は、その数と配置によって、人を内に導き招かれた実感を与える効果を担っていると考えられる。仕上げ材は、それを促していると思う。面的な照明を選択していない点も注目される。

一方、西ホールのみ、シェル型を用いず格子型を用いている。また、面によって天井全体からの照明を行っている。ホテルという非日常の場にあつて、さらなる非日常空間を演出しようとしたと考えられる。壁と天井の金粉仕上げは、それを促していると思う。同時に、外部へ向かう解放性を意図したことが、外部仕上げと出入口の数にから推察される。このことは、3種類の光源の形態の意味、それらと建築全体の空間構成や装飾の意味と関係しているのではないだろうか。

参考文献

- 1) 武庫川学院 上甲子園キャンパス 甲子園会館(旧甲子園ホテル)HP <http://www.mukogawa-u.ac.jp/~kkcampus/>
- 2) 近代デジタルライブラリー, 建築土木資料集覧(昭和4年), 建築土木資料集覧刊行会, <http://kindai.ndl.go.jp>
- 3) 甲子園ホテル号, 新建築(第6巻 第7号), 新建築社, 1930.7
- 4) 京阪神新建築, 阪神・甲子園ホテル, 建築と社会(第39巻 第1313集 第6号)